

対策の設定を要望したい。最後に資料の提供や描画などに協力頂いた藤原陸夫・三橋俊治・中島睦子・大場秀章の諸氏に深謝したい。

**Cypripedium guttatum** Sw. in Acta Acad. Holm. 251 (1800); Komarov, Fl. Mansh. 1: 508 (1901); Schlr. in Fedde Repert. Beih. 4: 81 (1919); Nevski in Fl. USSR 4: 596 (1935); Luer, Nat. Orch. U. S. & Canada 66 (1975).

Compared with *Cypripedium yatabeanum*, two leaves somewhat distantly disposed at the stem, 17-20 mm apart; the lip shorter, 14-

21-(25) mm long; stalk of lip shorter, 4-5 mm long; petals not expanded at apex; flower color white with dark purplish pink spots.

Hab. Akita Pref., Oga Peninsula (R. Mochizuki 1735, SHIN 179986). Newly found in Japan.

Distr. Europe, W. & E. Siberia, Sachalin, N. E. China, N. Korea, Alaska, Canada.

(Faculty of Science, Shinshu University  
信州大学理学部)

## ニュース

### 英語教科書に載った西岡京治氏（金井弘夫） Hiroo KANAI: Mr. Kyoji Nishioka in Schoolbook

1964年以来30年近くにわたって、農業をはじめとするブータンの発展に取り組んだ西岡京治氏が、かの地で客死されたのは1992年だった。西岡氏の地道な努力は、海外協力事業のあるべき姿として評価され、ブータン政府はその功績に対して1980年「ダショ」の称号を贈り、同氏の死に際しては国葬をもって報いたという。平成8年度高校英語の教科書（増進堂 New Stream II）に、Lesson 1として西岡氏のことが4頁にわたって紹介されている。生徒諸君がこれを機会に、同氏の仕事や海外援助の本質について、なにがしかの

感銘を与えられることと期待される。これについて森和男氏の個人誌 *Flora Asiatica* 164号(1996)で知った。ついでだが、森氏によると教科書の写真が裏焼きで、ブータン服の打合せが逆になっているという。たしかに、男性の写っている三枚の写真のうち、一枚は左前（これが正しい）、西岡氏は二枚とも右前である。これは民俗資料としてはまずい。植物の図や写真でも、デザインの都合で裏焼きにされることがあるが、対称性の研究などの際、眞実を見誤らせるおそれがある。注意すべきことである。

### ミズバショウの果実の味（金井弘夫） Hiroo KANAI: Taste of the Fruits of *Lysichiton camtschatcense* (Araceae)

1996年10月、尾瀬ヶ原総合学術調査の際、熊が食い散らしたミズバショウの熟果があつたので口にしてみた。意外なことにテンナンショウのような苛烈味ではなく、無味無臭で粉質の舌ざわりだった。ついでに放り出されていた果序の柄も味わったが、これもただ水っ

ぽくてわずかにあお臭さがあるだけだった。尾瀬では秋になるとミズバショウの果実が熊に食い荒らされていて、整腸といったなにか薬用的な採食となんなく考えていたが、普通の食餌なのかもしれない。